

## 近世節用集の序・跋・凡例（一）

高 梨 信 博

本稿は、近世に編纂・刊行された節用集のうち、序・跋・凡例およびこれに類する記事をもつものについて、それらの序・跋・凡例を翻刻し、若干の解説を加えたものである。

近世の節用集がどのようなものであるかは、まず節用集の内容それ自体からくみとるべきものであることはいうまでもない。だが、一方、節用集の編纂や刊行にかかわった人たちの記録は、節用集がどのようなものとして意識されたか、あるいはどのようなものであるうとして編纂されたか、さらには利用者にむけてどのようなものとしてよそおおうとされたかといった、広い意味での節用集の姿を反映するものである。そうした記録である序・跋・凡例などのなかには、常套的な表現とはいえ、ときには範疇的な謙辞があり、またときには過大な宣伝がふくまれることがある。なにが謙辞であり、なにが誇大広告であるかは、個々の節用集の検討をふまえ、その事実のうえに判断されるべきである。いまはそれを将来の課題として念頭におきつつ、やはりそうした序・

跋・凡例などをふくむその姿を近世の節用集の一面として正確に把握しておきたい。

序や跋や凡例といっても、その内容にはさまざまなものがある。ここでは右にのべたような目的にてらして、近世の節用集の理解に資するところのあるものを広くとりあげたい。ただし、意味分類（門）の名称とその範疇を説明したもの（〈部分之名〉）のようによばれることが多い）と、早引節用集でかな見出しの字数による分類についてのべたもの（〈文字引様〉）のようによばれることが多い）は、同種のものがくりかえしあらわれるので、調査範囲のうちでもっとも早い段階のものをあげるにとどめ、以後は原則として省略する。

現在までに調査することのできた節用集のうちでは、序・跋・凡例などをもつものは、全体の約三分の一である。一般的に、所収項目の面で先行の節用集を踏襲したにとどまるといふ性格のつよい節用集には、序・跋・凡例などがつけられることはすくない。

易林本を直接うけついで近世前期の節用集にはとんど序・跋・凡例などがみられないのは、そうした傾向のあらわれである。逆にいえば、ここにとりあげられた節用集は、近世の節用集のなかで、なにがしかの特色をもったものが多いということになる。

排列は、近世の節用集の展開のあとをたどるという意味で、年代順とした。ただ、早引節用集の類は別にまとめ、そのなかで年代順に排列することにした。今回とりあげるのは、早引節用集以外の節用集、すなわち、古本節用集以来の、いろはわけと意義分類による項目の分類をおこなう節用集を中心としたグループであり、そのうち享保年間刊行のものまでをおさめる。このくぎりは紙数のつごうによるものであり、享保年間まででくぎることに、さしあたって、特別の意味はない。

近世の節用集では、版がちがえば序・跋・凡例なども一方にあって他方にはないということがある。また、序・跋・凡例などができることの多い巻首と巻末には、破損のみられるものが多い。したがって、当然のことではあるが、ここに翻刻する序・跋・凡例などは、底本とした伝本におけるそのかぎりのものであることを確認しておきたい。そうした意味から、本稿での排列をきめる年代決定は底本の刊行年または成立年によることとし、その底本が『国書総目録』などにてらしてもっとも早い時期のものではないと考えられるばあいは、そのむねを付記した。

翻刻は原則として原文通りだが、つぎのような変更をくわえた。

①漢字の字体は現在通行のものに改めた。

②かりに句点をおぎなった。原文に句読点があるばあいはそれにしたがったが、記号はすべて句点はへ。く、読点はへ、く、に統一した。

③漢文などにもちいられた熟字符は省略した。

④双行でしるされているものは一行に改めた。

⑤必要に応じて「」内に注記をおぎなった。

なお、一書のなかに二つ以上の序・跋・凡例などがあるばあいは、そのあいだを一行分あけてある。

1 真草二行節用集 寛永一五年（一六三八）刊 国立国会図書館（亀田文庫）

部分之名

乾坤とは天地の間の事をいふ。

官位とは人の氏官途の事をいふ。

神祇とは神のことをいふ。

人倫とは人の上下万民の事をいふ。

名字とは人の名字の事をいふ。

支体とは人の五臓又は病身の上のことをいふ。

衣食とはきる物くいの事を云。

気形とは万のいける物の事をいふ。

草木とはよろつのくさ木の事を云。

器財とは万道具の事をいふ。

数量とはよろつ物のかす有事を云。

言語とは常々いひあつかふことばの事をいふ。

― 是は其所之上の一字を是に用て下へよみくだす也。

巻頭に門（意義分類）の内容や記号のつかいかたについての説明をおくというのは、近世の節用集が多数の利用者にむけて出版されるものであったことと関係するだろう。

単純に刊行年だけをとれば、寛永九年刊『二鉢節用集』（美濃版）や寛永一二年中野市右衛門版『節用集』に付されたものが管見のうちではもっとも早い。が、流布の状況などを考え、ここでは『真草二行節用集』をあげた。

〈時候〉門をかいているが、このまま以後の『真草二行節用集』諸版その他に踏襲された。〈時候〉門をおぎない、門の内容の説明をややくわしくしたのは、寛文十年（一六七〇）刊の『頭書増補二行節用集』（後出）である。

2 真草二行節用集（外題『真増補大節用集』） 寛文二年（一六六二）刊 東北大学図書館（狩野文庫）

夫節用集者童蒙愚昧之所<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>便而広学卒忘之雖為<sup>レ</sup>益字数甚少而無<sup>レ</sup>難字不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>求。故今古書俗語之取<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>用者増<sup>レ</sup>補於古板<sup>レ</sup>新令<sup>レ</sup>刊行<sup>レ</sup>者也。

寛文二年壬辰初春吉日

さはら木町通東のとう院東へ入町  
藤井五兵衛重刊行

近世の節用集の流れが直接易林本により、増補のあるものでも古本節用集のうちの異本によったとみられるものはほとんどないなかで、本書は（永禄十一年本（印度本、弘治二年本類の中）の如き異本を以て従来の本に増訂を加へたもの）『古本節用集の研究』である。

3 頭書増補二行節用集 寛文十年（一六七〇）刊 国立国会図書館（亀田文庫）

頭書節用集十三門部分之名并註

乾坤とある下には風雨雪霜山川宮室の類すべて天地のあいだの文字これあり。

時候とある下には春夏秋冬晦朔朝暮のたぐひすべて時節の文字これあり。

官位とある下には人のうぢつかさくらゐの文字あり。

神祇とあるしたにはよろづかみのうへの事の文字あり。

人倫とある下には士農工商君臣親戚人名のたぐひすべて人のうへの文字あり。

名字とある下には古よりつき来る所の名字あり。

身のうへの字あり。

いもの  
みず  
に  
い  
き  
な  
物  
く  
て  
物  
の  
三  
み  
り  
食  
月

木とある下にはよろゝ草木并に花藥種のたぐひの字あり

ものだから

[illegible][illegible]

と有も同。

是はその所々の上の一字を是に用てよみ下す也。——如此は上の二字を用てよみくたすなり。

さきにあげた『真草二行節用集』の〈部分之名〉とくらべると、〈時候〉がおぎなわれているほか、各門の内容の説明も、よりくわしく具体的になっている。

本書は書名からも知られるとおり「頭書」をもっている。「頭書」をもつ節用集としてはもっとも早いものである。「頭書」の最初に節用集の「節用」の意についてのべ、「按する」に此二字論語より出たる字也」とし、「あまたの書を読みだりに見る事を用ひずしてそれ／＼に用ゆべきの字を節よく一部に書あつめたるといふ義なるへし。（中略）又節用愛人」と

事の影響が大きかった。

『節用集大全』の項を参照。

合類節用集 延宝八年（一六八〇）刊 国立国会図書館（亀）

人庫

節用集二聯以應二童蒙之求二云

四年八月十五日後學 若耶三胤子遜序

『新刊節用集大全』には序や跋はない。

ところで、このころ延宝三年の序を有する『翰墨節用』と、延宝九年の跋を有する『武家節用集』が刊行されている。前者は漢詩文を作るための語彙集であり、その内容・形式ともまったく節用集とはことなっている。後者は、かな見出しとそれに対応する漢字語形を対としてかかげ、漢字は真草二行とするといった形式は節用集と同じだが、所収項目は弓・矢・刀・幡・直垂・甲冑・馬・鷹・犬などに関するものにかぎられ、いちじるしくかたよったものである。〈節用集〉という名は一般化し、その使用範囲も拡大してきている。その一方で、節用集自体においても個々の作品の命名法に変化を生じてきている。

5 頭書増補節用集大全<sup>二行</sup> 貞享二年（一六八五）刊 国立国会図書館（亀田文庫）

節用集は師鍊<sup>シレン</sup>の輯録<sup>ジッロク</sup>したまふよし從來<sup>ジウライ</sup>いひ伝ふれともその證<sup>シヨウ</sup>たしかならず。此書日用事物<sup>ジヨウジツブツ</sup>の字をあらはせり。されとも間<sup>マ</sup>その義をわきまへしりかたき字あるを名所<sup>メイショ</sup>は古今<sup>コキン</sup>歌枕<sup>カマクら</sup>に便り官位<sup>クワンイ</sup>は職原<sup>シヨクゲン</sup>百寮訓要<sup>ヒャクリョウクンヨウ</sup>にもとつき氣形草木は本草に根ざし食服器財は順か和名鈔を始とし其外の事物は諸寺百家の書を探りてあまねく頭書に〔約六字分破損〕童蒙<sup>ドウモウ</sup>の便りとす。敢て博洽<sup>ハクチャク</sup>の人のために〔約四字分破損〕

〈頭書〉をもった最初の節用集は寛文十年刊の『頭書増補二行節用集』だが、国会図書館所蔵本には〈頭書〉への言及はみられない。〈頭書〉は、節用集がかなの見出しとそれに対応する漢字表記の語形のみを主とし、註文がごくすくないために、〈間<sup>マ</sup>その義をわきまへしりかたき〉ことに対するおぎなひであった。この〈頭書〉の筆者については、木村秀次『寛文十年本「頭書増補二行節用集」について』（『馬淵和夫博士国語学論集』大修館、一九八一）に、苗村丈伯を擬する説がのべられている。また同論文によれば、京都大学国文学研究室所蔵の寛文十年版『頭書増補二行節用集』の巻末には柱を〈節用跋〉とする一葉があるとされており、その内容は、右にあげた貞享二年版『頭書増補節用集大全<sup>二行</sup>』の跋文とほぼ同文である。

『頭書増補節用集大全<sup>二行</sup>』は貞享から元禄年間にわたって版をかさねているが、国会図書館所蔵の貞享二年版以外ではここにひいた跋文はまだみていない。『頭書増補節用集大全<sup>二行</sup>』は、易林本以来の付録のほかにさまざまの付録が加えられているのが一つの特色である。〈頭書〉のなかにさし絵をふくむ版などもみることができる。

6 真草 広益二行節用集 貞享三年（一六八六）刊 国立国会図書館（亀田文庫）

広益節用集序

字によつて読声（ヨミコト）を求るには字彙（ジイ）有玉篇あり。読声によつて字を求るには節用集ありて世に行はるゝ事年已に尚矣。唯童蒙（ドモウ）の便りとなるのみにあらず。博學（ハクガク）の士といへども又辨（ベン）口の譏（マズ）を免かるべし。然れども間沢（マナヅキ）の字に乏くして節用の名にかなはず。さるに依て書林（シリン）競て文字（モノ）を増補（ゾウボ）すといへども誠に九牛（クウ）の一毛（イチ）にもたぐふべし。今此節用集は天の覆（フ）て照（テ）さずと云事なく地の載（カ）て洩（セ）す事なきがごとく广大（クワンダイ）に文字（モノ）を補（ホ）益（エキ）が故に広益節用集と号す。往年（往年）数梓（セツ）の節用集にたくらぶれば恰（アタカ）も泰山（タイサン）を蟻（アリ）に比（ヒ）するが如し。覽（ミ）人珍重（ジンジュウ）すべし。

千金之裘（チンセンノキウ） 台榭（ダイシャ）之櫓（ロ）節用（セツヨウ）之文字（モノ）集（シツ）而成（ニ）成。然未（シカ）識（シ）何人（ナニト）作（ス）也。或曰（イフ）東福師（トウフクシ）鍊（レン）嘗（カ）纂（サン）焉（ニ）。從（ツキ）倭語（ワゴ）而所（モト）需（ス）字（ジ）無（ム）不（レ）二枚（ニ）枚（ニ）。拳（ケン）一（イツ）実（ミ）童蒙（ドモウ）博識（ハクシキ）為（ニ）真宝（マホウ）之書（ノ）也。雖（レ）然（シカ）非（ヒ）無（ム）天瓢（テンピョウ）之私（ノ）私。此板（コ）本（ホン）大雨（オホアメ）洪水（コウスイ）蕩（タラシ）々（ニ）溢（ユル）三（サン）天地（チノチ）一（イツ）者（モノ）也。

貞享三丙寅年孟春吉祥日

書林 万屋庄兵衛 梓行

項目数は『新刊節用集大全』にはおよばないが、『合類節用集』に匹敵するかこれをうわまわる。各門のなかで〈益〉

の字を丸でかこんだ記号をもちいて、そのあとに増補した項目を明示してあげている。本書の編者については元禄三年（一六九〇）跋の『古文頭書大益綱目』を参照。

7 鼈頭節用集大全 貞享五年（一六八八）刊 国立国会図書館（亀田文庫）

自序

頃（コノ）剗（カ）剗（カ）氏（シ）偶（ニ）告（ツ）余（ニ）曰（ハク）合類（カウライ）節用（セツヨウ）之鼈頭（カウトウ）摺録（シヤク）已（ニ）尚（ナ）矣（ニ）。嘗（カ）聚（ス）其（ノ）編（ヘン）一（イツ）舟（フネ）以（ニ）運（ビ）之（ヲ）。何（ナニ）陽侯（ヨウコウ）之怒（イカリ）也（ニ）。櫓（ロ）傾（カガム）權（ケン）其（ノ）十（ジュウ）之（ノ）一（イツ）遂（ス）沈（シム）滅（メツ）焉（ニ）。爾（ノ）後（ノ）後（ノ）麗（レイ）絶（セツ）者（モノ）已（ニ）有（アル）年（ネン）矣（ニ）。冀（カ）一（イツ）借（カ）其（ノ）手（テ）足（ソク）之（ノ）補（ホ）之（ヲ）。然（シカ）則（シテ）豐饒（トウニョウ）荆璞（ケイハク）之賜（ノ）再（マタ）壽（ス）于（ニ）梓（シ）。余（ニ）退（ヒ）而（ニ）固（コ）辭（ジ）曰（ハク）素（ソ）為（ニ）神農（シニョウ）之（ノ）言（コト）未（ム）嘗（カ）嘗（カ）窺（カウ）二（ニ）文苑（ブンエン）一（イツ）也（ニ）。何（ナニ）以（ニ）能（ノ）之（ヲ）。姑（ニ）俟（マタ）二（ニ）博覽（ハクラン）一（イツ）也（ニ）。既（レ）復（フ）慨（カ）然（シ）以（ニ）為（ス）蓋（カ）夫（フ）繼（ス）絶（セツ）興（キョウ）廢（ヘイ）者（モノ）君子（コノノ）之（ノ）志（シ）也（ニ）。今（イマ）此（コノ）一（イツ）帙（シ）固（コ）袖（ス）中（チュウ）之（ノ）珍（チン）也（ニ）。若（シ）夫（フ）棄（ス）之（ノ）則（シテ）匪（ヒ）其（ノ）志（シ）也（ニ）。因（ニ）不（レ）羞（ハズ）皮（ヒ）伝（デン）強（カ）從（ツキ）其（ノ）需（ス）一（イツ）鳴（ネ）呼（コ）統（トウ）紹（ショウ）之（ノ）嘲（カウ）何（ナニ）以（ニ）解（トク）之（ヲ）乎（ニ）。

貞享五年龍次戊辰二仲夏

望日採（ニ）臺（ダイ）于（ニ）哲齋（テツサイ）

「漢字の左横にふりがなをつけたところがあるが、再読文字のはかはすべて漢字の右横とした。」

本書は『合類節用集』によっているが、あらたに〈頭書〉をくわえた点に特色があることは、右の記事によって知られ

るとおりである。ここにはふれられていないが、このほかに『合類節用集』とくらべて、かな見出しをかたかなからひらがなに改めたこと、真草三行・两点としたこと、註文を削除したことがちがっている。このちがいは、易林本をうけた近世節用集の推移の方向をそのまま反映したものである。

8 真草  
頭書大益節用集綱目 元禄三年（一六九〇） 跋 国立国  
両点 会図書館（亀田文庫）

大益節用集綱目序  
予往年節用集に頭書し後又文字を大益し梓に鑲て世の一助とせし  
もなを拾遺の再益なきにあらず。且真艸の字体をしれども篆  
の字体を付し毎部に脱字を大益し鑑頭には詳説を増註して綱の引  
字ごとに網の目のもれぬと云心とて節用集綱目と標題しぬ。

頭書大益篆字節用集綱目目錄凡例（以下、門名には楷書の左に篆書  
が付されているがはぶく。また、門の内容を説明した〈目録〉の  
部分もすでにあげたものとくらべて大きなちがいはないので省略  
する。）

乾坤（略）凡例曰名所神社仏閣宮殿の名は別に名所と傍題して  
事跡あるは頭書に記之。

時候（略）凡例曰一歳十二月の異名二十四節十干十二支相生

相尅等は卷末に記之。

神祇（略）凡例云神名神社神器神供祭礼等の文字は古来の  
神書より書出し補之者也。故事は首書に求むべし。

官苗（略）凡例云官位は職原を以て考へ四當はその文字の下  
に記し唐名掌職は首書又卷末に見ぬ。苗氏の在名は乾坤  
門に可求。

倫名（略）凡例云人名は和漢の聖賢佛祖画工隱逸哥人能書の名  
こと／＼く集む。故事は頭書に記之。

文体（略）凡例曰諸病の本名和名ともに此下に求むべし。

気形（略）凡例云本艸に載ところ本名異名ともに記之。

草木（略）凡例曰本艸に所載の本名和名ともに補之。

衣食（略）凡例云此下にたづねてなき字は衣類は器財門食類  
は草木門と互見すべし。

器財（略）凡例曰古来の名物近年の名作共に補之。

光彩（略）凡例云光彩字少きがゆへに部ごとに門を立ず。乾  
坤時候衣服門の内に混雜す。視人寮察焉。

数量（略）凡例曰諸法数群書拾唾等の書を以て補之。

言語（略）凡例曰和俗の世話字こと／＼く補之。誹諧の漢和  
狂詩狂聯句に便あらんがためなり。

――（略）――

凡例曰訓同して字異なるは一字を挙てその余は細字に書す。

凡例曰異字同訓といへども字によって義のちがひ有。譬はうつといふよみに鼓を撃敵を討といふ類のごとし。如レ此は続字を付て令レ知。

凡例云諸の字巨細に書載とはいへども万一尋る字なきときは二字あるべき字ならば一字づゝ分て尋ぬべし。たとへば塗桶塗笠と云字ならば塗と云字をぬの部の言語門に尋出し桶笠はかの部の器財門に尋出し取合て知べし。余皆准レ之。取合て知字の分は略せると云にはあらねど仮令也。取合かたき字は元來書載之。

凡例曰器財草木気形衣服の弁がたきは図に書て頭書に記す。

凡例云篆字は許慎が説文を證とする者也。道俗の名院軒の号など篆字に書たき時はいろはの部に一字づゝ尋出して取合知べし。

凡例曰古往今來節用集の卷末に重宝なる事共書加て梓行せるを此綱目にもこと／＼く書のせその外寛へて便りある事共大分増益しぬ。条目枚挙するに不レ違。覽て知べし。

昔倉頡模ニ鳥跡、而始作ニ文字。後世史籀作ニ大篆、以潤飾之、李斯又變ニ小篆、以簡易之。後漢以來人好ニ神隸之字体、鮮好篆籀之字体、者矣。本邦善レ書者世々不レ乏。而靡ニ善篆籀者、読者亦鮮焉。錦欄之繡紋、図画之印璽、器物之彫刻、往々苦レ不レ易読也。許慎作ニ説文十五篇、雖行于世、亦不レ知ニ四声切韻、則尋ニ某字、不レ得矣。余嚮編ニ次広益節用集、頃日又拾ニ其遺、補ニ其闕、全書成矣。命レ名曰ニ節用集綱目、字々付ニ篆字、使ニ以呂波之和訓、尋ニ引某字、

直知篆字也。彼繡紋印璽彫刻無一字之難読。然則此書之行梓庶幾童蒙之一助乎。語曰節用而愛人。智哉名此書。

元禄庚午初夏日苗村丈伯跋

さきに『頭書増補節用集大全二行』(貞享二年刊)の項でひいた木村秀次氏の論文では、この序と跋によって、〈頭書〉と『広益二行節用集』の作者を苗村丈伯と推定したのであった。

凡例に全体の構成にかかわることや増補項目の出所、検索上の注意、さし絵の利用などがしるされている。同訓字のあつかいが明記されているのも、節用集の凡例として最初である。二字の熟語について、一字ずつにわけて字をたずねるようになっているのは、現代の辞書における複合語のとりあつかいの問題に通じる。言語門の凡例のなかで〈俳諧の漢和狂詩狂聯句に便あらんがため〉とのべているのは、近世の節用集の使われかたを考えるのに参考となるだろう。

なお、〈頭書〉にさし絵をつけることは、『頭書増補節用集大全二行』のいくつかの版にもみることができ、元禄期においては、ほかに、『頭書大広益節用集』(元禄四年刊)や『頭書大広益節用集真草二点』(元禄六年刊)のように、さし絵のいっそう多い節用集も出版されている。



9 世話用文章 元禄五年（一六九二）刊 東京大学図書館（近  
世文学資料類従参考文獻編9、勉誠社、一九七六）

序

修理番匠下手大工利からざる筆鋒を削り鋸屑も謂々世話字を  
充棟の書より引出し三間端利に准じて三冊に造立人の垂準もい  
かどなれど梓に鑢斧の柄の朽ざらしむ。錐脱囊といへば余  
が下手細工の名も恥かし。墨曲の邪は覽人清鈍をつかひ撥撃を馮  
耳。

艸田子識

凡例

一 右用文章上中両卷に世話字を用ゆといへども間漏脱をふきによ  
つて此下巻に拾あつめて門をわけ出所を首書して尋やすからし  
む。此外世話字多しといへ共出処たしかならぬは不載之。  
一 古来の節用集に間世話字を載るといへども一門に一字二字を過  
す。よつて此下巻に備に世話字のせて諸人に便す。すでに節用  
集に出たる字は省て不載之。

凡文には貴人高位に披露する諸札格式の文章あり。朋友親族に通  
ずる切紙拾文の略札あり。ともに世話字の入事あれどもみな平仮  
名に書て埒を明る事をおもひて世話の正字を文章に綴る者也。

全三卷のうち、上・中巻は世話字をもちいた文例集で、下  
巻が世話字をあつめた語彙集である。下巻の巻頭には、別に  
《世話字節用集》の名がおかれている。右にひいたうちの  
《凡例》は、この下巻に対してつけられたものである。

《世話字》は近世の節用集においては、《増難字尽》のよ  
うな名で付録として加えられてきたものであった。その早い  
例としては『頭書増補節用集大全』貞享三年版がある。近世  
の節用集のなかで、付録としてその一部分をしめるにとどま  
っていた《世話字》が、本書ではそのみで一書をなすもの  
となっている。《世話字》をふくむ書としては、早く明暦二  
年（一六五六）刊の皆虚編『世話焼草』や、天和二年（一六  
八二）刊の永井如瓶子編『適言便蒙抄』などがある。これら  
はいずれも俳諧を視野において編纂されたものであった。節  
用集に《世話字》がとりいれられ、あるいは《世話字》を集  
めた書に節用集という名がもちいられるとき、それは、俳諧  
の世界と節用集とのあいだのかかわりを示すものであった。  
なお世話字については、『続無名抄』『常陸帯』『反故集』『増  
補大和詞』をおさめた『近世文学資料類従 古俳諧編47』の  
加藤定彦氏の解説などが参考になる。

10 字尽重宝記綱目 元禄六年（一六九三）刊 無窮会図書館  
（神習文庫）

字尽重宝記綱目序  
芸能の至要たるは書筆の道にかきれりと。故に古より今に至まて文学の業いやましに隆なり。しかあれば世にひろまれる所の字書其莫大なる事かそへつくしかたし。因て今寺あかりの幼童初心の爲に世間にもあつかへる若干の文字を抜集其出書を著し註釈を記して字尽重宝記綱目と号す。未練のともからの尋ややすく見易からんためなりと洛東隠士草屋の窓に向て序す。

〈重宝記〉は、『元禄太平記』（元禄一五年刊）に〈あきなひの勝手には、好色本か重宝記の類がましちや。〉といわれ、またへすでに大坂において家内重宝記が出来始めしより此かた、其類、棟に充ち牛に汗するほどあり。とされた日常百科全書の類である。節用集の世界でも、元禄六年刊半紙二つ切りの本書に〈重宝記〉の名がもちいられた。『元禄太平記』では右にひいたところに続いて、へしかれども此ごろは、はや重宝記も末になり万宝にうつる。とあるが、節用集でも元禄の末年には『増字万宝節用集真草』『大方宝節用集増字大成』などの刊行をみている。内容のうえで特にきわだった特色も持ちえないまま、商品としての自己主張をおこなうには、書名はきわめて重要なポイントであった。

11 頭書大成節用集二行 元禄十年（一六九七）刊 早稲田大学図書館

節用集の一書古采いんにんり。且雖多字数微にして直に当用之ために難成。而今諸書之内を撰考して当為まさために用之。未善字をば正之。繁字者はかりを略字をば増詳之。此書編集大成節用集と題して世の調法に梓あづき鐫きりるものならし。文流軒 印 印

『国書総目録』によれば元禄二年版がもっとも古い。この元禄十年版に付された序は、半葉（一ページ）の全体に陰刻でしるされている。

12 三才全書講林節用集 元禄一三年（一七〇〇）刊 早稲田大学図書館

#### 序

あつて屋のしげかつ、むめぞのゝとぼそにいり来て、風翁が糸屑の増注を乞はれるに、さしあひ去きらひの事、かなづかひなどのはし／＼は、年ごとの椽になしぬれば、いまさら筆をそふべくもなし。さりとていなぶねのいなみたうべき道かは。ざれうたのたねは、やおかゆく浜のまさごのかずかぎりとしもあらねば、よしやよのつねの世話に和語に、からくにのふみ我がてうのまき、これかが中よりとう出て、何くれの字をばかう／＼なむよめり、

しか／＼の事はとありかゝりなど、あつめても見ましやなど、おろかなる筆にかしこきことばりをけがすとせしほどに、げむろくとの春よりおもひたちて、あけのとしやおひ月までに、そこばくの紙をくるめ侍り。さてなんこれが名を、せつようといへるは、彼しげかつのもどめなり。今やうもてはやすめる、みうちかきものにして、かたのごとく、となへやすらかなるやうなればと成へし。いでやむかしより世におこなはるゝせつようは、もろこしのふみにもよしありとかや。用を節にしてなど、ちかき比よりいひ出なるも、人にたより有のみか、ひろくことを知らしむるの故もぞある。下官があつめしは、そのかしこきすぢはいさまだしらず。節は時なりとかやもよめるよしふとおもひ出るにまかせ、彼ざれうたのむしろにまじはらん人の、物わすれしたる節の用にたてよと、かいまろめてなげやりぬ。

白梅園驚水

俳諧とのつながりを書名に明示した節用集である。ただし、実際には『合類節用集』によつており、とくに俳諧に関する用語をあらたに集めたというものではない。書名に〈節用〉を用いることが書肆の求めによるものであることが明記されている。ここでは、〈節用〉を〈用を節に〉すると解釈することゝをへちかき比よりいひ出なる」とこととし、本書については、〈物わすれしたる節の用にたて〉るものとしてゐる。

13 童子字尽安見 正徳六年（一七一六）刊 国立国会図書館  
（亀田文庫）

四民童子字尽安見  
鳥跡結繩にも蒼頡こときの達智には文字を工夫し和朝にも牛涎盤虫に三十一字の画影を顕し其意味をしらす。僕幼学に習はずして壮年に啖臍事あり。責而老後の助なれやと前儒先生の著述編草を仮写して大海の一滴九牛か一毛採抜す。予がことき螢雪の勤なき愚盲兒童の弄種にもと花木に筆を揮ふ。羊羊烏焉馬の点画違繁多ならん。短智の作者自問自答黃吻の轉にまかせて四民童子字尽安見と題する而已。

松井兎睡誌

わらひたまえ誰もむかしは朧月

童子の目を悦しめんために次第不順にして初に羽毛鱗介を出し中頃に草花をさかせ果臝をならし後に器財飲食をすゝむ。吾世事にいとまなく十がひとつを集。天地言語は後板に露。尤いろはよせにせざるは其長たる物を首におき尻に其詞を載ゆえなり。尤世事の用字節用集に洩たるを拾ひ門々に入之。只寺子入学少助の弄にもなれや。

月更軒兎睡自序

跋

箸をとれば物喰む事をおもひ筆をとれば物かゝん事をおもふ。いま月更軒の集所の文字は頌にして義之のからことは弘法のいろはにて知せ今日多ひもせずと書終童も明るより見事を安す。仍而題号を 臘月涼安見といふは菊需淮堂

印 印

正字俗字これあるは二品に頭也。是正字をしらしめむためなり。俗字とも世にふれたる文字を用て改る事なかれ。はやく其用に叶ふを是とするもの歟。

正徳六歳丙申孟春吉日

作者 松井庄左衛門

〈同訓別格・畜獸門〉から〈湯火言辭・理義字集〉にいたる六十四門に分類している。節用集に含めてよいのかどうかという点にも問題があるだろう。弘化四年（一八四七）刊の『早引文字通』は本書の改題本である。

- 14 男節用集如意宝珠大成 享保元年（一七一六）刊 国立国会図書館（亀田文庫）

凡例

一 此節用集の本文字を行字にすることは行は眞の点画にして草は

これを省せる也。蓋し省字を以て本字は知がたく本字を以て省字はあひするゝの故に二行の細字にして煩しきを除くもの也。一 本文字の下に小註或は正誤の説等を加ふものは近世発明の人の考へ演る処を記するもの也。

一 引用する書の名には□をもふけてこれを分つ。

一 先書にまかせて十二門を分つといへどもあるひは飲食と気形と衣服器財の如きはまゝ雑へ出ものあり。見る人其前後を探り索むべき也。

一名神名所故人の名は増益して頭書にこれを集。

一 此書いさゝか幼童に便すといへどもをそらくは管見不堪の誤多からんのみ。只ひたすら後覽の人の改正を俟ものなり。

浪花津陳人山本序周識

凡例の第一条にしろされているように、漢字見出しは「行書」のみで、楷書をそえる真草二行という形式はとっていない。この点は同じ編者の手になる寛保三年（一七四三）刊の『女節用集罌粟家宝大成』と共通である。ただ、『女節用集罌粟家宝大成』が付録の内容も含めてながしかは『女節用集』であるのに対し、本書にはとくに『男節用集』としての特色は、表面上はうかがいにくい。

15 懷宝節用集綱目大全眞草 享保二年（一七一七）刊 国立国

会図書館（亀田文庫）

今代節用集類本甚多。雖其体紛雜而難用急卒之便。故今増益文字、新彫梓為懷中本名懷宝節用集綱目令改版者也。

享保二祀孟春吉日

京師店三条通升屋町

江府店日本橋南一町目

御書物所

出雲寺和泉掾

易林本をうけた近世の節用集は、イ・キ、ヲ・オ、エ・エの各部をそれぞれ別々に立てているが、元禄年間のころから、これらの各部を一方にあわせ、巻頭も〈乾・陰陽〉ではじまるものがあらはれ、従来の節用集にとってかわる。本書はそうした節用集のうちで跋をもったものとも早い時期のものである。〈頭書〉を加え、付録を増加して、美濃版とすることがもつとも一般的ななかで、本書は半紙二つ切の横本であり、〈頭書〉もなく、付録の種類も限られている。その点では〈懷宝〉の書名にふさわしく、また〈急卒之便〉にこたえようとしたものといえよう。

16 和漢音積書言字考節用集 享保二年（一七一七）刊 架藏

和漢音積書言字考節用集標題

嘗聞文章者經國之大業不朽之盛事。席卷字內囊括品物其功魁偉其德遠。嗟呼於書於言日夜昏明朝野尊卑不可莫文不可莫字。且夫聖門之學以格物致知而為先。翰林之才以博覽洽識而為貴。故古往今來儒積差事拔萃於經史提要於編牘大而天地山川小而禽獸虫豸微而陰陽神化顯而礼樂制度於是群書為堆剗闕互梓。雖然或偏儒僻仁疎正耽俗。或存彼略此錯異亂別。杜撰抵牾魯魚亥閔以為不寡其患。僕弱好文書聊有所欲。進得俸則務不遑漸足餬口。退在市則遭災火僅全四肢。薄命所罹宿志愈損。不幸積歲過兩破爪。一旦發憤走記誦甘糟粕彼此之交事物之舛。新書旧籍街談衢話拾摭綜緝部類參考遂終一帙之功。名曰書言字考。庶幾使初學童蒙徐探典故不拘詞章速勵力行於道有日。是則僕微意也。時元禄歲次戊寅南呂階裏五葉東武城隅賤士槇島昭武謹題。

追加

此書凡例之首卷烏有于京師戊子之火。故合記之書目及時令節序甲子異稱之類闕如。後人熟察矣。

『和漢音積書言字考節用集』は項目数約三二八〇〇、多くの引用文献を含むくわしい註をのせ、近世の節用集のなかで

は、特異な存在であった。付録に属する部分は火事で焼失したとされるされているが、それにしても、〈頭書〉もなく、付属的な部分はごくすくない。かな見出しはかたかなで漢字見出しは楷書体、注文は漢文という形式も、近世の節用集のなかでは、少数派に属するものであった。

- 17 大嘉節用無量宝蔵 享保四年（一七一九）刊 国立国会図書館（亀田文庫）

夫節用集世間□品々有といへとも字数不多也。今□此節用集改正本文頭書増字〔約六字不明〕百字也。

- 18 万倍節用字便書翰文統文章字尽 享保十一年（一七二六）刊 東京学芸大学図書館（望月文庫）

懷中寸珍節用集凡例  
世間流布の節用集数多有。然といへども、本毎に文字の誤なきにあらず。依よつて今真の一行を除、遡還文字を大に広益おおく書翰文章文統の詞を入、小本に改正して旅懷中寸珍節用集と号、奥に到ては、京都町小路の名を委細註し又財宝衣類魚鳥の数名を記畢。博学才智の爲にはあらず。初心の童蒙見やすく尋ねやすからん爲と云而已。

享保十一年三月吉日 長村半兵衛板行

従来の節用集における門の排列は、門の数や名称にちがいはあっても、〈乾坤〉にはじまり〈言語〉におわる点では一致していた。本書は〈言語〉を最初におき〈乾坤〉を最後にしている節用集のもっとも早いものである。

ここにひいた〈凡例〉の先頭と文中には、本書の書名を〈旅懷中寸珍節用集〉としており、〈万倍節用字便〉はあるいは改題かもしれない。宝暦三年（一七五三）刊の『新万倍節用宝書翰文統文章字尽』と、嘉永二年刊の『新しいは節用集大成』は本書の改題本である。前者には、ここにひいたのとはほぼ同内容の文が〈太田白善書〉として付されている。〈旅懷中寸珍節用集〉の名が示すように、たて一一センチ、横七・八センチの袖珍本である。

- 19 俗字指南車 享保十六年（一七三二）序 国立国会図書館

古人育こじんいく英才えいさいといふこと、固より幼童に無器用なる生粟は、すべてなき者ぞ。たゞ父兄の教訓図をはつし、姑息愛より癖づきて、あしき人にもなるとかや。抑おさへ教訓の道において、読書の二つは万芸の権輿にして、俊傑とよばるゝも此道の外なし。嗚呼小子、ためにこの指南車を編置こと、一字の紀憶一点の書筆も、つもりて能者の名を得んことをねがふのみ。幼成若よせいじやく天性てんせい習慣しゆかん如ごと自然しぜんと、いへる聖言実傳せいげんじつでん哉。

雛之士 中村平五三近子記

中村三近子は『悉皆世話字彙墨宝』『満字節用錦字選』『満字節用書翰宝藏』『万蔵節用字海大成』などにその名がみえるほか、往来物その他の入門的な性質の著作が多い。本書も頭書に『当流文章尽』を置き、手紙や証文などの書きかたを知らせる内容と一体になっている。節用集の付録として手紙や証文の文例集を加えたものは元禄のころからみられるが、それは節用集の使われたかと関係することであろう。

20 悉皆世話字彙墨宝 享保一八年（一七三三）刊 国立国語研究所

俗間に節用字書の類繁多にして字々体備はり用足れり。しかし用  
に臨んで字を繚引くに、動すれば引字欠闕すること多し。かるが  
ゆへに此書には、彼の一百百万殿御様候等の類、至近の字を  
悉く省いて、火朽囉囉吒等のとき、要務の字を数千増益して、  
童蒙文字思想に、いさゝか事の闕ざるたよりとす。

礫文字ワケモノみなそなはるといへども、童蒙ドウモウ和俗ワソク通用の書面ショウメンをわきまへざれば、文言ゴゴンのとりあつかひに疎く、片楮ハタタテ往来ワライに不都合フコゴウの文章ワカクサ多し。かるがゆへに此書コノシヨかしらに当流タウリウの用文章ヨウワカクサあまた記して日用文ニヨウモンを通ツウのたすけとし、又むかしよりいひ習ナラはしたる俚諺セハの来由ライユをいろ

は分スミにして、速ハヤかに見安ミヤスからしむ。たとへば磨イシ芸ノスグイのことは、いの字の下をたづね、飛頭トビカウ蠻マンの事は、ろの字の下をたづねみる例レイこれなり。

[illegible]

中村平五三近子筆作

前項と同じく中村三近子の編である。ここに述べられた内容は、近世の節用集に付された序跋等のなかで、もっとも自覚的なものの一つといつてよいだろう。中村三近子について、山田俊雄氏が『節用集改編ものの一例についてその一』（『成城文芸』73、昭和五〇年四月）のなかで、『一代書用筆林宝鑑』を中心に述べておられ、『悉皆世話字彙墨宝』にも言及されている。

なお、書名のなかの〈字彙〉は、明の梅膺祚撰の『字彙』によっている。書名に〈字彙〉をもちいた近世の節用集にはほかに『字彙節用悉皆藏』があるが、また、〈正字通〉をもちいたものには『新撰正字通』『大成正字通』『明海節用正字通』（真草）『大成三行』（真草）があり、〈字典〉には『字典節用集』があった。

21 万蔵節用字海大成 享保一九年（一七三四）刊 国立国語研究  
所

序

節用集は類字の部門細註ともに古書の儘なりとはいへとも往々板  
行の度に書写の誤多く魯魚の差異すくならず。故にいま備  
筆をわすれ愚眼に及ぶ所を改正し并に先書にもれたるの数個条衍  
文ながら童蒙の一助にもと拾ひ集めて梓に寿す。猶後人の再考  
を待のみ。

下洛散人 三宅袋河

此節用集今年あらたに一筆をもつて悉改訂す。一紙半葉たりと  
いふとも疎略に切張の彫刻を用ひす。猶千里の便覧此集に拠て往  
見有へし。

首題の下に中村三近子の名がみえるが、内容としては先行  
本をそのままうけついでものであり、特にめあたらしいところ  
もなく、ことさらに中村三近子を編者としてかかげる理由  
がわからない。さらに、序はその中村三近子ではなく、三宅  
袋河の名で書かれている。三宅袋河は巻末に「書筆 京師土三  
宅袋河」としてその名がみえている。中村三近子と三宅袋河  
の關係はどのようなことであつたろうか。近世の節用集にお  
ける「編者」という存在の位置づけが問題になる。

なお、「一紙半葉たりといふとも疎略に切張の彫刻を用ひ  
す」ということをことさらにうたうことができたのは、そ  
うした「切張」がすくなくなつたことを示している。

（一九八七・九・二三）